View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Saga University Institutional Repository

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム ー変容するフランス政治と「国民戦線（FN）」について考える（6）

畑　山　敏　夫

はじめに
1．フランス社会の変容と右翼ポピュリスト政党
（1）「栄光の30年」の終わりと政治の変容－安定した政治の終焉
（2）フランスの経済社会の変化と新しい分断の時代へ－「二つのフランス」へ
（3）移民問題の争点化－FN の躍進を支えたもの
（4）政治システムの変容－FN というオルタナティブ
2．政治家マリーヌ・ルペンを理解するために－ルペンの娘に生まれて
（1）マリーヌ，親に貰いし名は－「共和国の悪魔」の娘に生まれて
（2）弁護士から政治の世界へ－マリーヌと FN というミクロコスモス（以上，第50巻第３号）
3．ルペン時代の FN－二つの FN の連続性を理解するために
（1）周辺的政党からの脱却－鳴かず飛ばずから突然の躍進へ
（2）「新右翼（la Nouvelle droite）の加入と FN の刷新
（3）「新右翼」の FN 改革－政党イメージ転換へ
（4）党の分裂と FN の危機（以上，第50巻４号）
4．「危機の FN と党の刷新－「マリーヌの FN」への道
（1）再生に向かう FN－分裂の後遺症を抱えながら
（2）抵抗勢力の排除へ
（3）党の地方で拠点を築く－エナン・ボーモンでの政治家修行
（4）新党首マリーヌ・ルペンの誕生と党の刷新（以上，第51巻第１号）
5．「マリーヌの FN」の「古さ」と「新しさ」
（1）FN は変わったのか？
（2）「脱極右政党」への長い道

（３）アウトサイダーからインサイダーへ－FN の適応戦略

（４）FN の変化と連続性－「節度あるオルタナティブ」へ（以上，第51巻第２号）

６．グローバル化時代の「ポピュリズム」

（１）EU 統合への失望と欧州懐疑主義の広がり

（２）FN の反 EU 論－グローバリストのプロジェクトに抗して

（３）右からのオルタナティブ－処方箋は「再国民化」（以上，第51巻第３号）

７．マリーヌ路線の成功－FN の復活と躍進

（１）選挙での連戦連勝－始まった FN の復活

（２）マリーヌの「善戦」を支えた支持者たち

（３）2017年大統領選挙－マリーヌの「善戦」

（４）明らかになった FN の限界（以上本号）

７．マリーヌ路線の成功－FN の復活と躍進

（１）選挙での連戦連勝－始まった FN の復活

マリーヌの新党首への就任によって，FN を取り巻く環境は一挙に変わり始めた。マリーヌ人気の高まりと並行して，2002年の大統領・国民議会選挙から低迷していた党勢は上昇軌道に乗った。新党首のもとで2012年の大統領と国民議会選挙で健闘した FN は，それ以降の選挙で，特に，2014年，2015年の欧州議会選挙や地方選挙で躍進を重ね，「マリーヌの FN」の復活は揺るぎないものとみえた（表７-１参照）。

その背景には，女性新党首という「新しい FN」へのイメージ転換（「マリーヌ効果」），移民・難民問題やイスラムとテロの問題の持続と深刻化，失業や購買力低下といった生活と雇用を取り巻く状況の悪化，グローバル化による産業や地域の衰退と格差の拡大などの既に紹介した要素のほかにも，オランド政権の記録的不人気，保守中道陣営の予備選挙で７人の候補が競合する対立と内紛，政治スキャンダルといった既成政党・政治家に逆風となる状況があった。既成の政党と政治家に対する不満と不信は高まり，棄権や急進

的政党の得票が増大していった[1]。そのようなFNに有利な環境の中で，マリーヌは2017年の大統領選挙を迎えることになった。

地方選挙でのV字回復

2009年欧州議会選挙も約109万票（6.3%）の得票に終わり，FNの低迷はつづいた。FNが低迷期を脱して党勢回復の兆しが見えたのは，2010年3月に実施された地域圏議会選挙であった。FNは第1回投票で11.42%，220万票以上の得票で復調の兆しを見せた。特に，第2回投票に進出した12の地域圏でFNは平均17.8%を得票して第1回投票から2.5%票を上積みしている。1980年代のFNの台頭が地方選挙で始まったように，今回の復活もローカルな場から始動した[2]。

世論調査機関IFOPの地域圏議会選挙に関する分析によると，FNが最も伸張しているのは2007年大統領選挙でルペンが最も票を失った地域であり，FNは失地回復を果たしたといえる。また，FNは前回の85議席から118議席へと議席を伸ばしたが半分は初当選の議員たちで，新人候補の擁立と大量当選は党の再生を予示していた。地域圏議会選挙の成功は，マリーヌにとっても重要な意味をもっていた。マリーヌは党勢回復のシンボルとして，党の次期リーダーの地位を固めたからである［Igounet 2014：414，Rosso　2011：273］。

マリーヌは2011年1月に新党首に就任するが，2011年の県議会選挙は最初の試験となった。小選挙区制で実施される県議会選挙はFNにとって不利なタイプの制度であるが，FNは県議会選挙史上で最高のスコア（全国平均で約15%，候補を擁立した選挙区平均では19.2%）を記録した。第2回投票で，FNは小選挙制度の壁によって多くの選挙区で得票を伸ばしながらも敗退したが，ヴォクリューズとヴァルの両県で2議席を獲得している。

その選挙で「マリーヌ効果」が表れていた。典型的な変化は女性票の割合の高さであった。これまで女性での支持が一貫して低かったFNにとって，女性票（15%）が男性票（16%）と拮抗したのは初めてのことであった。第5章で言及したように，女性党首の就任と党イメージのモダン化・穏健化によって，FNへの投票に対する女性の抵抗感が緩和された結果と考えられる。

表７－１ 2012年以降のFNの選挙結果（％）

年	選挙の種類	得　票　数	絶対得票率	相対得票率
2012	大統領	6421426	13.95	17.89
	国民議会	3528608	7.66	13.60
2014	市町村議会	1046603	2.74	4.76
	欧州議会	4712461	10.12	24.86
2015	県議会	5142241	12.04	25.24
	地域圏議会	6018914	13.29	27.73
2017	大統領（第１回）	7678491	16.14	21.30
	大統領（第２回）	10643937	22.38	33.90
	国民議会	2990454	6.29	13.20

出典［Ivaldi 2017：86］

マリーヌは新党首に就任して最初の試験に合格した。

2012年大統領・国民議会選挙，勢いづくFN

地方選挙で回復の兆しを見せたFNであったが，国政選挙でも復調を印象付けた。2012年の大統領選挙は，マリーヌにとって初挑戦であった。カリスマ的リーダーである父親の後継候補が務まるのかが問われる選挙であった。個人人気に大きく左右される大統領選挙の場合，ルペンというカリスマ的リーダーの存在に多くを負ってきたことは確かである。

2002年の大統領選挙からマリーヌはルペンの選挙を取り仕切り，党内で大きな影響力を築いてきた。だが，裏方ではなく党の顔として通用するのかは未知数であり，リーダーとしての資質と能力を証明するためにも大統領選挙で父親を超える結果を出す必要があった［Amjahad 2012：74］。

ただ，マリーヌにとって幸運なことに，FNは有利な情勢の下で大統領選挙を迎えようとしていた。サルコジ政権による新自由主義的経済政策や福祉の削減は失業の増加や生活レベルの低下を招き，経済不況に苦しむ中間層や労働者を直撃していた。また，サルコジ政権の移民問題への強硬な言説や政策はFNの排外主義的立場を正当化した。前回（2007年）の大統領選挙では，サルコジへの期待からFN支持者の保守的部分がサルコジへと流れたが［畑山　2008：83-88］，今回はサルコジ人気の低迷によってサルコジからマリーヌへの逆流現象が期待できた。

結果は，マリーヌは第1回投票で約642万票（17.89％）を得票して，大統領選挙ではFN候補として最多の票を集め，社会党候補オランドと保守候補サルコジに次いで第3位につけた。2007年に父親のルペンが獲得した約384万票（10.4％）を遥かに凌駕する結果で，FNの復活を国政選挙でも印象づけると同時に，マリーヌは党首としての地位と威信を固めることができた[(3)]。

2012年大統領・国民議会選挙での善戦を踏まえて，マリーヌはFNを中心とした広範な結集へと乗り出した。それが2012年秋に結成された「ブルー・マリーヌ結集（Rassemblement Bleu Marine=RBM）」である。その目的は，フランス国民の主権と共和制の価値を尊重するすべての愛国者を結集することであった。弁護士のG・コラールは個人的資格で，保守主権主義者P-M・クトー（Paul-Marie Coûteaux）が率いる「主権・独立・自由（Souveraineté Indépendance et Libertés）」と「祖国と市民権（Patrie et Citoyenneté）」は政党としてRBMに参加している［Igounet 2014：429］[(4)]。

鳴り物入りで発足したRBMであったが，FNを核とした結集の試みは容易ではなかった。P-M・クトーはマリーヌとの不一致を理由に2014年4月に党を去り，A・ショプラードもブログの内容をめぐってマリーヌと対立して2015年11月に離党してしまった［Dézé 2016：58］。政界での孤立を打破して政権参加の道を開くというマリーヌの課題の達成は容易ではなかった。

そのような挫折を伴いながらも，マリーヌは新党首として迎えた最初の重要な国政選挙で合格点を上げ，党内での評価と影響力を高めた。マリーヌ人気の高まりによって，選挙の顔としてのマリーヌの地位は強化された。

マリーヌの勢いは止まらない－「歴史的」得票の連続

2012年の大統領・国民議会選挙を成功裏に乗り切った「マリーヌのFN」は，その後の選挙でも勢いは止まらなかった。

FNにとって次の重要な地方選挙は2014年の市町村議会選挙であった。というのは，基礎自治体での議員の増加は党活動の面で基礎体力を強化し，自治体執行部の掌握は実務能力と政権担当能力を証明する絶好の機会だからである。FNは人口千人以上の自治体597で選挙に挑戦し，11の自治体で市政を掌握し，全国で1500名以上の自治体議員を獲得している［Ivaldi 2017：85-

86，Igounet 2014：446-447]。

マリーヌの拠点都市であるエナン・ボーモンでは，側近のＳ・ブリオワが第１回投票で50.3％を獲得して当選を決めている。エナン・ボーモンはマリーヌの強固な拠点になっただけでなく，「マリーヌのFN」の象徴的存在になった［Igounet 2014：444-446]。

2014年の市町村議会選挙でも，FNは党勢の復活を証明した。FNは597自治体で約22000名の候補者を擁立し，そのうち422が人口９千人以上の自治体であった。1996年の分裂前の最盛期に臨んだ市町村選挙時の444自治体には及ばないが，2001年（184），2008年（106）に比べたら，FNの党勢の回復は明らかである［Fourquet 2014 43-44]。候補者の人材，選挙運動を支える組織や資金力といった条件が整いつつあることが示されている。

FNは勢いを保ったまま欧州議会選挙を迎えた。FNにとって，欧州議会選挙は比例代表制で実施され小政党には有利であること，政権の帰趨に関わらないので政治的不満や不信を表現する機会になることに加えて，今回はEU統合への不満が高まる中での選挙であった。もちろん，そのような政治状況は，EUを批判してきたFNには有利なものであった。

予想通りFNは24.86％という画期的な得票を記録し，第１党に躍り出た。二大政党であるUMP（20.81％）と社会党（13.98％）を大きく凌駕した。前回（2009年）の欧州議会選挙では6.3％と不振であっただけに，FNの復調は目を見張るものがあった。

2015年の県会議員選挙と地域圏議会選挙でもFNは好調を維持する。2015年の県議会選挙は，20017年大統領・国民議会選挙に向けてFNの勢いを確認するという点でも，小選挙区で実施される地方選挙でもFNが得票できることを証明するという点でも注目すべき選挙であった。結果は，25.24％の得票を獲得し，全国で70名を県議会に送り込んだ。

地域圏議会選挙でもFNの勢いは止まらなかった。第１回投票では前回の得票投票（11.42）を16％上回る28.4％という「歴史的」勝利（FN副党首F・フィリッポ）を納め，第２回投票27.73％とのいう未曽有の得票で385名の地域圏議会議員を全国で誕生させている。県ごとに集計される地域圏議会選挙では，FNは36県でトップに立った（保守陣営31県，社会党陣営18県）

［Le Gall 2026：30］。

とりわけ，ノール＝パ＝ド＝カレとピカルディの両地域圏では第1回投票で得票率が40％を突破し，プロヴァンス＝アルプ＝コート・ダジュール地域圏でも45.2を記録した。マリーヌは大統領候補としての地位を不動のものとすると同時に，地方レベルの選挙でFNが大量得票できることを証明した[5]。

「右でも左でもなく（ni gauche, ni droite）」という独自路線と「UMPS」と左右の既成政党名を合成した批判と体制への拒絶を訴えるマリーヌの対決路線は，少なからぬ有権者に浸透している。だが，小選挙区の壁を超えること，そのためには政党システムでの孤立から脱却するという課題も明らかになった［*Le Monde*：31 mars 2015］。

（2）マリーヌの「善戦」を支えた支持者たち

党首への就任以降，国政や地方政治のレベルで快進撃をつづけた「マリーヌのFN」であったが，その理由は単純であった。それは，従来の支持層を手堅く動員すると同時に，新しい支持層への浸透・拡大に成功していることにあった。

すなわち，新旧の支持者の合流が成功のカギであった。相変わらず男性からの得票が上回っていること，低学歴で職業的には労働者や事務従事者，商人，手工業者，失業者で得票が多いこと，移民や失業問題が最大の投票動機になっていることが指摘されている（2011年4月にマリーヌへの投票意向を示した有権者に対して実施された世論調査）。また，地理的には，地中海沿岸，ローヌ川沿いの地域，フランスの東北部といった伝統的にFNが強い地域で好調な成果を上げていることも確認できる。つまり，支持層の構成や地理的分布において「ルペンのFN」との強い連続性を示している［Dézé 2012：153］。

マリーヌのFNの支持者像－支持層の連続性

支持層の社会職業的プロフィールでも，「ルペンのFN」からの連続性は顕著であった。表7-3は1995年から2012年までの大統領選でのFN投票者の社会的プロフィールを示しているが，そこから「マリーヌのFN」の支持

者像を整理しておこう。

第１に，年齢的には25－65歳の世代と25歳以下の青年層で大きく得票を伸ばしていることである。高齢者で相対的に支持率が低い傾向は変わらないが，職業生活や家庭生活で経済社会的混乱の影響を最も強く受けやすい世代での支持は高い。その年代は現在の政治に対する異議申し立ての手段としてFNに投票していると考えられる。

青年層における支持の高さであるが，権威主義的傾向を示し，ナショナリズムに敏感な青年層の存在が指摘できる。失業，不安的雇用，社会的排除などの犠牲となり，低い教育レベルにとどまる青年たちは棄権か急進的政党への投票に向かう傾向がある。彼らが棄権ではなく投票行動を選択するとき，ナショナリズム，エスノセントリズム（自民族中心主義），権威主義の体質から，FNに投票する指向性が強い［畑山 2009： 9 -12，23］。

第２に，社会職業的カテゴリーでは労働者と事務職で最も得票率が高いこと，失業者の支持が増加していることである。

1990年代から社会経済的苦境に直面した民衆層がFN支持層で増加しているが（FN支持層の「プロレタリア化」），グローバル化が本格的に進展するなかで，民衆層の不満や不安が高まり，FNへの支持が増加していると考えらる(6)。

中間層と上層での相対的な支持の低迷を加味すれば，支持層の「プロレタリア化」が継続していることが確認できる［Ivaldi 2017：99］(7)。

マリーヌは，労働者層や事務職など従来から強かった社会層で手堅く得票し，民衆的支持層の政治的動員に成功している。2012年の大統領選挙で「グローバル化の敗者」である民衆層票が，左翼－保守の既成政党ではなくFNへと向かう現象は顕在化していた。2008年のリーマン・ショックによる経済・金融危機に襲われた民衆層の不安と不満を政治的に動員する能力をマリーヌは見事に証明している［Perrineau 2015：233-234］(8)。

職業的カテゴリーだけでなく，2011年から始まるFNの復活を支えた有権者が，男性，青年，低い学歴といった属性を加味したとき，FNは支持者レベルで見ると高度の連続性を示していた［Dabi 2015 96］。

旧左翼の地盤への浸透－民衆層を味方につけて

FN は労働者を始めとした民衆層で支持を拡大してきたが，その傾向は現在でも続いている。特に，産業の衰退（製造業の工場の閉鎖・移転や鉱山の閉鎖）によって雇用と生活が破壊された地方都市では，労働者や住民が既成左翼政党を見限って FN へと支持を転じる現象が顕在化している。そのことは，旧産炭地でマリーヌの拠点都市であるエナン・ボーモンについて紹介したが，その例として，多くの旧産業都市がアメリカの産業地帯として栄えた「ラストベルト」と同じ運命を辿っている。

その典型的な例は，2017年の大統領選挙に関する報道で日本でも紹介されたフランス北東部モーゼル県の「鉄の街」アイアンジュである。鉄鋼世界最大手アルセロール・ミッタルの工場閉鎖によって，街は衰退に追い込まれた。左右の既成政党に裏切られた「周辺のフランス」の典型である街で，FN への支持が急速に広がっている［朝日新聞 2017年 1 月 3 日，The Asahi shinbun Globe, june 2017，no. 194］。

2015年の地域圏議会選挙でも，民衆的有権者の多い地域圏ピカルディについて，「忘れられた人々のフランス（Frannce des oubliés）」と呼ばれている地域で，長らく左翼に投票してきた有権者が FN へと向かっていることが指摘されている。選挙を重ねるにつれて，そのような支持層を忠誠化するだけではなく拡大している。マリーヌはピカルディの準都市部と農村部の「忘れられた地域（territoires oubuliés）」に注目し，FN は，その地域で大量の票を集めている［Dolez et Laurent 2016：136-138］。

地方都市だけでなく大都市であるパリ近郊の自治体でも，FN の浸透という現象が見られる。パリ近郊は伝統的に社会党，共産党が強い地域で，「赤いベルト地帯」と呼ばれてきた。だが，多くの地域は現在では不況と失業に苦しみ，移民の集住，犯罪と治安の悪化といった現象に直面している。

FN は左翼代行的な「社会的右翼」の路線を選択することで，1990年代から民衆層で支持を拡大してきたことは前言した。そのような路線はマリーヌ党首にも継承され，2012年の大統領選挙から中間層と民衆層を主要なターゲットとしてきた。2013年には，マリーヌは「忘れられた人々のツール・ド・フランス」をメディアで華々しくスタートさせ，2017年の大統領選挙では，

エリートによって蔑まれてきた「人民」の候補というイメージを定着させるべく小都市や農村を訪れた［Ivaldi　2017：98］。民衆層は地域の衰退の中で，既成左翼の政策に彼らの困難の要因を見ていたが，マリーヌは民衆層の異議申し立てを体現することに成功している［Perrineau 2014：36］。

新しい支持層への浸透

「マリーヌの FN」は支持層の特徴や得票分布においてルペン時代との強い連続性を示すと同時に，いくつかの点で顕著な変化も呈している。「ルペンの FN」の支持層を継承しつつ，マリーヌのもとで新たな有権者を獲得していることが復活の原動力であった。

FN に流入してきた新しい有権者であるが，第１に，既成政党・政治家に失望した有権者である。具体的には，サルコジに失望した保守的有権者，オランドに失望した中道左派の有権者が FN に流入してきている［Dabi 2015：96］。

第２に，これまで男性票の優位がつづいてきたが，マリーヌの下で女性の支持が拡大していることである(9)。

その傾向は，女性党首に交代した直後の2012年大統領選挙から顕著になっている。これまで伝統的家庭観・女性観から女性有権者は FN を忌避してきたが，近年では女性，特に労働者と事務職の女性たちで FN への支持が増大している［Mossu-lavau 2017：220］。

2007年の大統領選挙では男性13%，女性７％と６％の得票差があったが，2012年大統領選挙（男性20%，女性17%），2017年第１回投票（男性22%，女性21%），第２回投票（男性36%，女性33%）と男女の得票率はほぼ拮抗するまでになっている（表７-３参照）。

女性党首というソフトなイメージ，「脱悪魔化」戦略によるイメージの改善が党への忌避感を緩和することで，FN への投票を躊躇っていた女性有権者を投票に踏み切らせたと思われる。

第３に，これまで浸透の弱かった有権者で支持が高まっていることであり，具体的には35－９歳の中年層，中間管理職といった社会的属性の有権者で支持を伸ばしていることである［Dabi 2015：96］，マリーヌのもとでは公共部

門の被用者でも支持を拡大していることである。

民間部門と比べて公共部門でのFN支持は低いが，マリーヌのもとで公共部門での支持は拡大している（表7-3）。2012年大統領選挙では25％（私的部門23％），2017年第1回投票22％（同26％），第2回投票40％（同46％）と，私的部門の被用者と遜色のない得票率を記録している[10]。

「マリーヌのFN」は2012年から左翼代行的な「社会的右翼」のイメージを強化し，介入主義的・保護主義的な「大きな政府」の路線を展開してきた。また，公務員や公共サービスの役割にも理解を示し，新自由主義の攻撃から公共部門を守る姿勢も強調してきた［Ivaldi 2017：101］。そのような公共部門や公務員に対する好意的な立場が，公共部門の被用者にFN支持を広げていると考えられる。

「マリーヌのFN」が復調した鍵は，従来からの支持層を維持しながら，新しい支持層への浸透に成功していることにあった。つまり，これまでFNに投票してきた有権者層での支持を確保すると同時に，これまでFNに投票してこなかった社会層で支持を拡大している［Philippot 2011：61-62］[11]。

もちろん，それは偶然の産物ではなく，党首に就任してから旧来の支持層に受ける移民－治安問題の問題を強調しつつ，社会経済的テーマ（グローバル化の文脈の中での雇用と購買力の防衛，強力な国家による公共サービスの擁護など）も展開するというマリーンの戦略の成果でもある［Dabi 2015：99］。

得票分布から見えてくる躍進－得票の全国化

選挙での得票分布からも，「マリーヌのFN」が選挙で好調な秘訣が分かる。地図7-1は1988年大統領選挙でのルペンの得票地図である。それを2017年大統領選挙での得票分布（地図7-2）と比べたとき，従来からFNが好調であった地域で支持を維持・拡大しながら，新たな地域で票を伸ばしていることが分かる。

地理的にはルアーヴル＝ペルピニャンを結ぶ線の東側の伝統的にFNが強い地域，地中海沿岸の南東部フランス，北東部フランスで好調に得票している。これまで弱かったフランス西部や北西部，南西部で票を伸ばし，FNへ

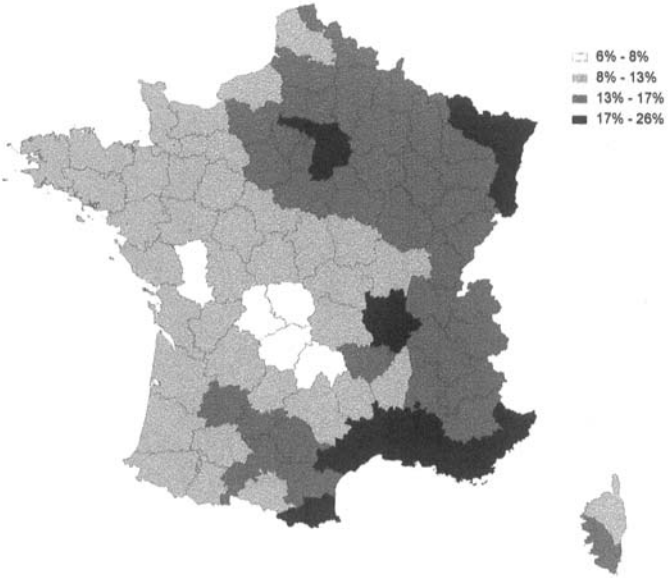
の投票を避けてきた保守やカトリック信仰の強い西部フランスでも支持を増やしている。

1980年代の躍進から，FN の支持基盤は地中海沿岸，都市部，フランス北東部といった特徴を示してきた。そのような伝統的地盤に加えて，2000年代に入ると FN は新たな地盤を築いていきた。それは，フランス北西部地域と農村部，都市近郊での支持拡大であった。そこは地域産業や農業が衰退し，貧困や失業，の増大に苦しむ地域であり，そのような社会経済的困難を抱える地域で FN に有利な環境が整っていった［Perrineau 2012：61-62］。

2017年の大統領選挙でのマリーヌの得票分布には，得票の全国化という動向が鮮明に表れていた。パリやリヨンといった大都市部を中心にマクロンが大量に得票し，周辺部や都市近郊，農村部のフランスでマリーヌが善戦するという構図が浮かび上がっている。

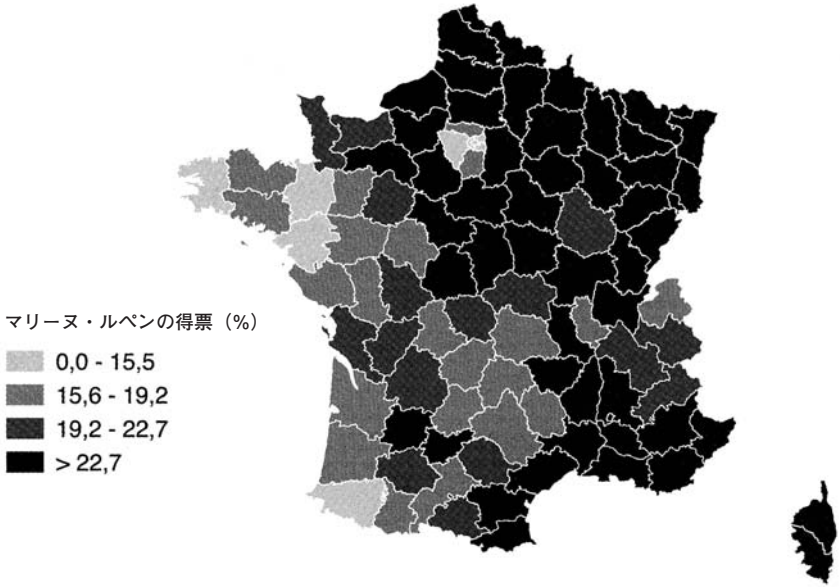
2000年代初めから農村部への浸透が顕著になるが，そのような傾向は一層

地図７－１　1988年大統領選挙第１回投票でのルペンの得票分布



出所：Cartes & Données, Articque.
出典〔Perrineau 2014：49〕

地図7-2　2017年大統領選挙（第1回投票）でのマリーヌ・ルペンの得票分布



出典［Ivaldi 2017：92］

拡大している。そのような傾向は，2012年から2014年欧州議会選挙，2015年県会議と昂進し，農村地域での投票率は23%から28%，34%と一貫して増加している［Dabi 2015：97］。長らくFNが浸透できなかった農村部でも徐々にFNへと傾斜していった。それは，一部農民の深刻な危機と国政とEUを牛耳るエリートへの怒りを反映した現象であった［Ivaldi 2017：98］。

（3）2017年大統領選挙－マリーヌの「善戦」

新党首就任後，FNは地方選挙や欧州議会選挙で快進撃を見せた。それと並行して，次の大統領でのマリーヌへの投票意向は上昇していった。2014年春には25%を超え，2015－2016年は平均で28%であったが，2018年後半には，投票意向は30%を突破している［Ivaldi　2017：87］。世論での追い風のなか，マリーヌは2017年の大統領選挙を迎えることになった(12)。マリーヌにとっては二度目の大統領選であったが，前回よりは有利な環境の下での挑戦であった。伝統的支持者と新しい支持者で着実に票を伸ばし，FNは大都市部を除

いて全国的に得票できる政党へと脱皮していった。

「善戦」の理由

大統領選挙の結果は，マリーヌにとって善戦であった。というのは，2017年の大統領選挙は，マリーヌにとって過去最高の得票を記録し，2012年と比べて得票率で3.4％，得票数では120万票以上の伸張をみせているからでる。2012年にはトップに立った県はガールだけであったが，今回は47県でトップに立ち(マクロンは44県)，全国的に集票力を強化している[Ivaldi 217：93][13]。

第１回投票では，フィヨン（20.01％）とアモン（6.36％）という左右の既成政党候補を抑え，マリーヌはマクロン（24.01％）に次いで第２位につけた。21.30％というマリーヌの得票は，大統領選挙に何度も挑んだ父親ルペンが果たせなかった数字であった。

それでは，2017年の大統領選挙でマリーヌが善戦した理由は何であったのか。もちろん，2017年の大統領選挙だけに限定された要因ではないが，マリーヌに有利な状況を具体的に確認しておこう。

第１には，「新しいFN効果」，もしくは，「マリーヌ効果」である。すでに詳説したように，それは，マリーヌのもとで積極的に取り組まれてきたイメージ戦略（「脱悪魔化」戦略）の成果であった。

それはFNの「新しさ」の演出と，古いFNイメージからの脱却として取り組まれてきたが，暴力的で急進的な極右政党というイメージによる忌避感・嫌悪感を緩和し，「普通の政党」として認知されることで，新しい支持層をFNに引き付けることに成功した。

第２には，FNの政党システムへの参入と定着を可能としてきた，移民，治安，失業といった十八番のテーマが有効性を発揮していることである[14]。それに加えて，イスラムとテロというテーマが関心を高め，これまで反イスラム・テロについて執拗に取り上げてきたことも，FNにとって有利に働いたことである。

特に，2015年以降，ヨーロッパでの難民危機とテロの頻発という状況は，FNにとって願ってもないチャンスであり，当然，マリーヌはそれを積極的に利用してきた。マリーヌは繰り返し，新しい「野蛮な侵入」について語り，

フランスの国法にイスラムの法であるシャリーアが取って代わる可能性について警鐘を鳴らした［Ivaldi 2017：87］。

FNへの投票者では，そのようなテーマは投票動機の上位を占めている。表7‐2は2017年大統領選挙での投票動機を示したものであるが，FN投票者では「移民」「テロ」「治安」という投票動機が突出して多いのが分かる。やはり，FN支持者は移民－治安（－テロ）を核とした問題に関心が強く，そのようなテーマ群を媒介にしてFNを支持していることが分かる。

第3には，有権者の既成政党離れがマリーヌに有利に働いたことである。共和党と社会党という，これまで政権交代を繰り返してきた2大政党の両候補（フィヨン，アモン）が第1回投票で姿を消したことが，既成政党・政治家の不人気を象徴していた。

1980年代以降，フランス革命以来の根深いイデオロギー対立は終焉を迎えた［大嶽　2017：148］。イデオロギーに基づく安定した支持が揺らいだ時，有権者の不安に的確に対応できない既成政党に対して不満と不信が高まった。不満のはけ口として，一度も試されていないオルタナティブとしてFNに投票する有権者が増加していった。

第4には，地方選挙で勝利を重ねることで，ローカルな場でFNの地方組織が強化され，全国的な組織網と中堅幹部層が充実したことである。

FNは2015年6月の時点で，約1500名の市長村議会議員の他に，24名の欧州議会議員，2名の国民議会議員，2人の上院議員，62名の県会議員，358名の市域圏議会議員を擁している［Ivaldi 217：87］。議員の増加はFNの可視化にとって有効であり，党の日常活動や選挙運動にとっても足腰を強化する効果があった。

その具体例が，議員候補のリクルートである。地方議員の人材プールは，2017年の国民議会選挙で候補のリクルート源として貢献した。572名のFN候補のうち269名（47％）が地方議会か欧州議会の議員であった［Evans　et Ivaldi　2017：194］。FNの地方での組織強化と制度化の進展が，大統領選挙でのマリーヌの良好なパーフィーマンスを支えていたのである。

そのような地方での組織と影響力の強化は，2011年の党首就任からマリーヌが意識的に追求してきたことである。他党に比べて貧弱であった地方議員

や幹部を充実させて強固な地方組織を整備することが，2017年の大統領選挙を視野に着々といつ減されてきた［*Le Monde*：8 décembre 2015］。

第５には，国際的なポピュリズム現象の広がりが，マリーヌに追い風となったことである。

2016年には英国での国民投票でEU離脱派が勝利し，同年には米国でポピュリスト的手法を駆使したトランプ候補が当選し，ヨーロッパでも左右のポピュリズム政党が伸張を見せていた。先進国における「右傾化」の流れは2018年にも続き，ドイツやイタリア，スゥエーデンなどで，ポピュリズム政党が良好な選挙パフォーマンスをあげている。

2017年には，フランスやオランダ，ドイツ，イタリアの右翼ポピュリズム政党の指導者がドイツのコブレンツに集まり連携をアピールするなど，「右傾化」の流れを利用することを試みている。また，ヨーロッパにおけるテロの頻発は欧州の極右に勢いを与え，ベルリンからロンドンまで多くの外国人嫌いの政党がイスラムの危険性を告発している［*Le Monde*：14 Janvier 2015］。

第６には，古い支持層を維持・拡大しながら，新しい支持層を拡大していることである。

そのことは，マリーヌの党首就任からFNが党勢を伸ばしている理由として既に紹介したが，2017年大統領選挙でも，そのような傾向は持続している（表７-３参照）。FNは民衆的有権者（労働者，事務職）で支持を拡大し，党勢拡大の原動力としてきた。2017年大統領選挙第１回投票では，労働者で39％，事務職でも30％を獲得している。第２回投票でも，それぞれ60％，47％を得票している。また，第１回投票でディプローム不保持者26％，職業資格保持者（BEPC/CAP/BEP）32％と，これまで同様に比較的低学歴の有権者で高い支持を得ている。

他方で，マリーヌが党首に就任して以降，新しい支持層として女性，青年，公務員，中間管理職，自由業・上級管理職，バカロレア保持者，バカロレア２保持者といった，それまで浸透できなかった社会層でも支持を伸ばしている。

地域についても，2017年の大統領選挙での得票分布からも確認できる（地

図7-2)，FNが地方・欧州議会選挙で躍進してきたパターンである，伝統的地盤での支持の維持・拡大と新たな地域への浸透が再現されている。

FNの高い得票を記録した地域をみれば，これまで強かった地域との連続性を示している[15]。特に，エーヌ，ノール，パ＝ド＝カレ，アルデンヌ，オーブといったフランス北部の諸県でマリーヌは最良の得票をあげている。地域産業が衰退し，失業率の高い地域とマリーヌの投票が相関しており［Ivaldi 2017：94-95］，左翼代行的な「社会的右翼」の路線が，そのような地域での支持拡大につながっていることは明らかである。

グローバル化の進展によって，「豊かなフランス」と「恩恵を受けないフランス」へと分断されるなかで，FNは後者の社会層と地域に浸透している（第6章参照）。

マリーヌは地方都市や農村部で票を伸ばし。衰退した産業都市や疲弊した農村部への浸透に努めてきたが[16]，その成果が得票分布に表現されているといっていいだろう。この点については，大都市部が体現している「勝ち組」

表7-2　2017年大統領選挙第1回投票での投票動機（%）

	全体	メランション	アモン	マクロン	フィヨン	デュポン＝エニャン	マリーヌ
購買力	27	35	28	30	18	31	21
移民	26	7	3	6	33	32	69
失業	25	23	22	32	27	22	19
テロ	24	10	11	17	28	26	46
税金	21	17	12	22	27	29	17
社会的不平等	20	42	45	15	6	13	10
治安	19	6	5	11	24	18	42
医療制度	18	21	26	24	12	21	9
欧州統合	18	11	20	25	19	14	18
労働時間	16	21	23	17	19	16	5
政治の機能	15	23	17	22	5	15	5
教育制度	14	14	20	22	12	12	4
財政赤字と公的負債	12	5	6	12	32	12	5
環境	10	22	32	9	1	7	3
公共サービスの将来	8	15	13	10.4	4	4	3
国際的緊張	4	3	3	18	11	4	2

設問：「あなたが投票で重視した3つの争点を次の中から選んでください」
Ipsos：2017年大統領選挙第1回投票調査（2017年4月19－22日に実施，4698名の回答）
出典：［Le Gall 2017：7］

のフランス」と地方や農村の体現している「負け組」のフランスという，フランスの格差と断状況を反映していると言えよう。

ただ，マリーヌが相対的に浸透できていない地域も残っている。例えば，フランス西部であり，ブルターニュ，ペイ＝ド＝ラ＝フランス，アキテーヌといった地域圏である。例えば，イル＝エ＝ヴィレーヌ，フィニステール，コト＝ダルモール，ロワール＝アトランティックといった自治体では得票は15％にも届いていない［Ivaldi 2017：9，91- 3］

以上のように，FN は例外的な地域と社会層を残しつつ，全国的に平均して得票できる政党になっている。そのことが，今回の大統領選挙でのマリーヌの善戦を可能にしたと言えよう(17)。

（4）明らかになった FN の限界

マリーヌに立ちはだかる障害

とはいっても，FN は2017年大統領選挙の結果に決して満足してはいなかった。決選投票でマリーヌ票が40％を超えると期待していた FN 幹部たちにとって，30％台前半に終わったことは不満の残る結果であった。マリーヌが善戦したのは間違いないが，大統領選挙で当選するためには克服すべき多くの限界が横たわっていることも確かであった。

第１に，選挙での躍進にもかかわらず，党の基礎体力が十分についていないことである。比例代表制で実施される地方選挙・欧州議会選挙は，確かに FN が復活・伸張する機会を提供した。だが，欧州議会，地域圏議会，市町村議会議会を見たとき，マリーヌ党首の下で大幅に当選者が増えたとはいえ，FN の議員数や掌握する自治体数は依然として貧弱なものにとどまっている。

例えば，2014年の欧州議会選挙で約27％とトップの得票で23議席を獲得したが，欧州議会のなかで圧倒的に少数派にとどまっている。地方レベルでも，約36700の自治体首長のうち11自治体，1757名の地域圏議員のうち360名足らず，536500名の市町村議会議員のうち1540名，4108名の県議会議員のうち60名を占めているにすぎない。国政レベルではもっと悲惨で，2012年の国民議会選挙では577名の国民議会議員のうち２名，348名の上院議員のうち２名しか擁していない［Igounet 016：40］(18)。

表７－３　大統領選挙における FN 投票者の社会的プロフィール（2007-2017年）（％）

	2007	2012	2017（第１回）	2017（第２回）
全体	10	18.3	21.4	34.3
性別				
男性	13	20	22	36
女性	7	17	21	33
年齢				
18－24	9		21	33
25－34	8		25	39
35－49	13		26	42
50－64	11		22	34
65歳以上	6		14	24
職業				
農業	8	n.d.	n.d.	n.d.
職人，商人	10	17	19	33
自由業，上級管理職	2	13	10	19
中間管理職	5	19	17	28
事務職	10	28	30	47
労働者	17	33	39	60
社会的身分				
民間部門被雇用者	12	23	26	40
公的部門被雇用者	9	25	22	34
自営	7	19	19	33
失業者	12	n.d.	20	51
学生	5	n.d.	n.d.	
退職	8	10	17	29
学歴				
ディプローム不保持	13	49	26	46
BEPC/CAP/BEP	12	25	32	46
バカロレア所持	7	23	25	38
バカロレア＋２	3	16	17	32
上級教育	2	7	8	17
サンプル数	N＝2208	N＝3509	N＝3668	N＝2470

出典：［Ivaldi 2017：100］

第３には，地方選挙での勝利によって党組織が充実に向かってきたとはいえ，それでも政党組織としては限界があった。

党員数を見ても，2015年７月時点で51551名の党員を擁しているが，その数は社会党，共和党，共産党に大きく水をあけられている。党勢が上げ潮のなかで，着実に党員数や地方議会での議員数を増やしているが，政党組織としての基礎体力はまだまだ貧弱である。党の財政と人材面で党員や議員の存在は大きな意味をもっているだけに，そのような面での立ち遅れは重要である。

第４に，これまでの偏った支持者構造は是正されてきたが，支持の調達が十分にできない社会層が存在し，包括政党的な集票には課題は残っている。

それは，社会の上層と中間層，すなわち，経営者，自由業，上級管理職といった職業や学生層，保守的な高齢者，相対的に富裕で高学歴な社会層への浸透は相対的に弱く，社会の中・上層での支持の拡大が課題である。

第５に，「脱悪魔化」戦略にもかかわらず，「脱極右化」が徹底できていないことである。

2017年３月に，ニースのFN幹部ブノワ・ロイエ（Benoît Lœuillet）が歴史修正主義的発言で停職処分を受けた。その１か月後に，ヴェル・ディヴでのユダヤ人の一斉検挙に関するフランス国家の責任を否定するマリーヌの発言が大きな波紋を広げた［Ivaldi 2017：89］。

2015年10月に名誉党首であるルペンの除名という「脱極右化」の切り札を切ったにもかかわらず，「マリーヌのFN」は「普通の政党化」に逆行する失言を，それも党首マリーヌが歴史修正主義的発言をするという失態を見せた。「脱悪魔化」の限界を露呈したといえる。

2017年の大統領選挙直前に実施された調査[19]ではFNが「極右政党」である回答は77％にのぼり，「民主主義にとって危険」という回答も59％に達している。また，FNに統治能力があると考える回答者は29％に過ぎず，80％が脱ユーロの主張を拒絶している（FN支持者でも40％以上が拒絶）。

圧倒的に多くの有権者は，FNが極右政党であると考え，信頼できるオルタナティブな政策を提案し，統治能力を備えた政党であることを疑問視している。「脱悪魔化」を推進して，具体的な政策提案を重視することでFNへ

の信頼性を高めてきたマリーヌの努力にもかかわらず（第5章参照），FNは信頼できるオルタナティブとして有権者に認知されるには程遠かった［Ivaldi 2017：89，Evans et Ivaldi 2017：199］。

克服されない党内対立

第5に，結党時からFNに執拗に付きまとってきた党内対立が，マリーヌの下でも克服されていないことである。

大統領選挙後に，副党首F・フィリッポに対して党内から批判が集中した。極右の歴史的原点への回帰や移民と治安のテーマの最優先化を求め，フィリッポが推進してきた国家による保護主義という主権主義戦略に批判が向けられた。また，フィリッポが掲げた脱ユーロの路線をめぐっても反対論が噴出した。党内対立の結果，フィリッポは離党することになったが，高度な思考力とコミュニケーション能力を備えた有能な幹部を失ったFNは，戦略的・イデオロギー的方向性を再確立することを余儀なくされている［Evans et ivaldi 2017：185-186，200］[20]。

マリーヌの右腕であったフィリッポによって進められてきた「党の左傾化」，すなわち，ケインズ主義と保護主義を基調とした政策，国家による介入主義の路線に対して，L・アリオ，マリオン＝マレシャル・ルペン，ジャン＝リシャール・シュルゼ（Jean-Richard Sulzer）といった「リベラリスト派」は批判を加えてきた。その結果，2017年の大統領選挙のプログラムでは，国家の介入，社会的再配分，公共サービスの擁護と企業負担の軽減や相続税の引き下げといった両派の主張が併存する妥協的産物になっていた［Ivaldi 2017：90］。

他方，反マリーヌ派からも脱落者がでている。2017年5月10日，反マリーヌ派の中心人物であるM・マリオン＝ルペン（Marion Maréchal-Le Pen＝マリーヌの姪）がFNを離れている。彼女の離党は，国民議会選挙で右派の影響力の強いフランス南部で大きな阻害要因となった［Evans et Ivaldi 2017：186］。

マリーヌの下で党勢が順調である間は党内対立は潜在化しているが，選挙の顔として通用しないとなれば再燃する可能性がある。

第６に，政界での孤立状態の打破は重要な課題であるが，その展望が容易に開けないことである。特に，既成政党による反 FN 包囲網である「共和主義戦線」の形成を回避し，国政参加に道を開くためにも孤立状態からの脱却は不可欠である。

といっても，左翼陣営で連携相手を見つけることは不可能なので，FN は保守勢力との協力を追求するしかない。とりわけ，欧州統合への反対で共通する「保守主権主義者」が協力相手として最も可能性がある。現に，その代表的人物である P-M・クトーが2012年に「ブルー・マリーン結集」に参加するという成果を上げたが，2014年には路線の違いからクトーは信奉者たちとともに離反している。また，2017年大統領選挙でも，「欧州懐疑主義派（主権主義派）」の取り込みを図り，Ｎ・デユポン＝エニャンとＰ・ドヴィリエとの連携を模索したが大きな成果はあがっていない。[Evans et Ivaldi 2017：198-199]。

第７に，政党システムにおいて，ポピュリズム的手法をとる新たなライバルが登場してきたことである。すなわち，政治の現状を厳しく批判し，欧州統合の現状にも批判的立場をとるメランションと「不服従のフランス」の存在である，「左翼ポピュリズム」と呼べるメランションたちは政治的立場において FN と対極的であるが，労働者を始めとした民衆層の支持を奪い合う可能性がある。マリーヌと FN が既成政党へのオルタナティブとして FN の魅力を失ったとき，「左翼ルペニズム」と呼ばれる民衆的支持者が「左翼ポピュリズム政党」に移行することはありうるし，逆に，「左翼ポピュリズム」を支持してきた民衆的有権者が FN に鞍替えする可能性もある。

ただし，活動家や投票者として FN に転じた旧左翼支持者の例は多いが，選挙で左翼支持者が大挙として FN に投票する現象は起きていない。2017年の大統領選挙では，マリーヌは第２回投票でメランションに投票した有権者の支持を期待した。しかし，実際はフィヨン票の20％がマリーヌに流れたが，それとは対照的に，メランション票は７％しかマリーヌに投じられていない。左翼代行的な「社会的右翼」の路線によって「左翼ポピュリズム」に共鳴する有権者を獲得するという思惑は見事に外れた。反グロバーリズム，反 EU・ユーロ，反ネオ・リベラリズム，保護主義といった政策上の重複にもかかわ

らず，社会的・道徳的価値観の根本的な違いは2人のポピュリズム的・急進的候補の支持者を接近させることはなかった［Ivaldi 2017：107-108］。

以上の点を踏まえれば，二回投票制を前提とする限り，組織の基礎体力を増し，選挙での運動量の増強によって支持者を拡大したが，政界での孤立状態を打破することは実現できていない[21]。

マリーヌは党の刷新によって広範な有権者を結集することを重視し，政権参加に向けては保守との協力が想定されている。しかし，そのハードルは高い。これまで，保守・中道政党は，少なくとも中央レベルでは頑なにFNとの協力を拒絶してきた。FNが勢いを増すにつれて，FN包囲網が形成される一方，FNとの協力を探る動きも現れる可能性もある[22]。

おわりに－FNの可能性と限界

選挙の結果で見る限り，「マリーヌのFN」は地方選挙と欧州議会選挙を梃子に華々しい復活を遂げている。2014年の欧州議会選挙では第一党に躍り出て，その勢いのままに2015年の地域圏議会選挙でも快進撃をつづけた。FNは6つの地域圏（ノール＝パ＝ド＝カレ，ピカルディ，ラングドック＝ルシヨン，ロレーヌ，オート＝ノルマンディ，シャンパーニュ＝アルデンヌ）で右翼陣営のトップにつけている。それは，これまでのFN－保守の力関係からは画期的なことであった。保守右派候補デュポン＝エニャン票を加えると，更に5地域圏（アルザス，ブルゴーニュ，サントル・ヴァル＝ド＝ロワール，フランシュ＝コンテ，PACA）でFNは保守を凌駕していた［Le Gall 2017：42-43］。

2017年の大統領選挙でも予想通り善戦し，第一回投票では7678491漂（21.3%）を得票した。それは父親ルペンも達成できなかった数字であり，マリーヌの初陣であった2012年の大統領選挙から3.4%の伸張であった。

マリーヌが2017年の大統領選挙で善戦したのは，彼女が長年にわたって取り組んできた党刷新の成果であった。特に，2002年大統領選挙で経験した反FNの逆風を教訓に取り組んできた「脱悪魔化」の成果だといえる。そのことは，2017年には父親ルペンの時と違って，マリーヌの決選投票への進出が「マリーヌ・ショック」を引き起こさなかったこと，決選投票で「極右政党」

の勝利を阻止するために投票に行く動きも起きていないことが示している[23]。

2017年の大統領選挙におけるマクロンの勝利は「分断された」フランスを浮き彫りにした。「蔑ろにされ」「相手にされない」と感じている人々，グローバル化の「敗者」に属する人々が大挙としてマリーヌに投票している。それは，経済社会的困難とアイデンティティをめぐる国民の不満と不安に対して関心を示し，対策を講じる役割を既成政党が果たしてこなかったからである。マリーヌの善戦は，社会に遍在する有権者の失望を反映している［Ivaldi 2017：111］。

グラン・ゼコールから高級官僚，金融界，そして政界入りと典型的なエリートであり，新自由主義的な発想や考えに立つマクロンに，民衆層の不安と不満に応える役割を果たせるのだろうか。マクロンという急遽登板したエリート政治家への期待が失望に変わったとき，2022年の大統領選挙では有権者が希望を託す新たな候補が現れるのだろうか。あるいは，左右両翼の既成政党による政権交代という道に戻れるのだろうか。

もう一つの可能性は，経済社会的危機の持続のなかで政治不信が昂進し，左右のポピュリズム候補の影響力が拡大していくというシナリオである。他国でのポピュリズム勢力の動向といった政治状況とも絡みながら，2022年の大統領選挙の行方はフランスの政治と民主主義にとって重要な岐路になる可能性がある。マリーヌにとって，2012年の大統領選挙がホップ，2017年大統領選挙はステップであるとすれば，2022年の大統領選挙はジャンプである。その時までにFNは勢いを持続し，マリーヌが党首の地位を保っているのか。まだまだ未確定の要素は多い。

2018年に入ってもポピュリズムの流れはヨーロッパで強まりを見せ，トランプ大統領はポピュリズム的扇動を繰り返している。そして，ポピュリズムの波はブラジルにまで拡散している。この現象が現代社会に根差す構造的なものである限り，簡単に消滅に向かうことはないであろう。

次章では，現代社会の文脈の中でFN現象について解読し，議会制民主主義の優等生と思われたフランスでの右翼ポピュリズム政党について考えてみたい。

注

（1）棄権という選択からも政治不信が読み取れる。2012年の大統領選挙では，棄権の動機として37％が「どの候補のプログラムも説得力がない」と回答しているが，2017年では19％に低下している。2017年には「政治家には失望させられたのでもはや信じられない」という回答が24％から41％へと急増している［Le Gall 2017：68-69］。プログラムよりも政党と政治家への不信・不満から棄権していると解釈できる。

（2）フランスの選挙制度が小選挙区制（国民議会，県議会）と比例代表制（欧州議会，地域圏議会，基礎自治体）の混合で実施されていることは，FN のような小政党にとって重要であった，比例代表制で実施される地方選挙（基礎自治体，地域圏）や欧州議会選挙が存在することは FN にとっては救いであり，その選挙を突破口に政党システムに参入することができたからである。

（3）2012年の大統領選挙直後に実施された：国民議会選挙では小選挙区の壁に阻まれて当選者は 2 名にとどまった(マリオン・マレシャル＝ルペン－次女ヤンの娘, G・コラール)。だが，エナン・ボーモンの選挙区でマリーヌが善戦し，決選投票で社会党候補に100票差にまで肉薄したことは重要であった。そのことで，マリーヌは新党首への道を確実にしたからである。

（4）RBM のように党外に候補を求めて，これまで関係を持ってこなかった多彩な人物を FN の候補者として迎え入れる試みは過去にもあった。1986年の国民議会選で「国民連合（Rassemblement national)」が開放政策として推進された。だが，党外から国民議会選挙で当選した保守的な名望家たちは党内での確執の果てに離党してしまい，企画倒れに終わっている。ちなみに，FN は2017年の大統領選挙後に「国民連合（RN)」と党名変更したが，その名称は1986年にまで遡るものである。

（5）欧州議会議員の存在も含めて，議員の増加は FN の活動力の向上にとって重要であった。特に，地方議員の増加は地方での党活動にとって貴重な人材を供給することになった。また，選挙での得票の増加は政党助成金の増加や選挙資金の還付として，議員の増加は議員歳費からの党への上納金の増加によって党財政の改善にも貢献した。例えば，2014年の欧州議会選挙では FN の議員は 3 名から23名へと大幅に増加したが，各議員には歳費の月額 1 万500ユーロの他に議会出席への手当て 2 万 1 千ユーロが支払われている。FN は欧州議会で「国民と自由のヨーロッパ（Europe des nations et libertés)」という会派を結成したが（2015年 6 月），FN は2016年度の会派への助成金として約322万ユーロを受領している。また，2016年初頭の時点で，FN は欧州議会議員に94名のアシスタントを提供されており，欧州議会は FN に財政と雇用の面で大きな恩恵をもたらしている［Turchi 2016：46］。

（6）FN は意識的に民衆層を対象とした政策を打ち出していた。例えば，2015年に開催された FN のリヨン大会の閉会演説で，マリーヌは年金額の維持，社会保障に個人の境遇に応じた第 5 の手当や寡婦の生活と医療費といった政策に言及している［Dabi 2015：

101]。

（７）2017年の大統領選挙第１回投票の際に IPSOS が実施した調査でも，FN 支持層の民衆的性格が浮かび上がっている。FN への投票は，「衰退しつつある職業」に就いていると感じている有権者では30%，最も低所得の世帯に属する有権者では32%，家計では極めて生活が困難という回答者では43%に達している［Ivaldi 2017：99]。

（８）疎外された「プレカリアート」と呼ばれる民衆的社会層が FN に投票していることは確かであるが，その層では棄権も多かった。工場労働者，事務職などの民衆的社会層は数的には多数派であるが，選挙の場では棄権によって少数派になりつつある[Mandon 2001：159]。

（９）女性票の増加については，女性党首によるイメージ転換とともに，公共サービス部門の比較的低賃金の女性被用者の支持増大が指摘されている［Ivaldi 2017：102]。

（10）公務員での支持拡大という現象は，2015年の地域圏議会選挙で顕著になる。FN は地方公務員で27%，国家公務員で33%，医療系公務員で39%の支持を獲得している［Mayer 2016：11-12]。

（11）FN に投票する有権者に過去との連続性が顕著であることは投票動機を見ても歴然である。表７-２は各大統領選挙の候補別に投票動機を集計したものである。FN 投票者が他の候補に比べて圧倒的に高い数字を示している項目は「移民」「治安」「テロ」であり，FN が一貫して得意としてきた争点である。

（12）FN にとって有利な世論は，すでに2010年頃から形成されていた。2011年10月に実施された調査では60%がフランスには移民が多すぎると考え，49%は資本主義体制を根本的に変えるべきと回答している。また，60%がフランスの民主主義はうまく機能していないと考え，52%が政権政党として左翼－保守も信頼していない。2012年大統領選挙第１回投票日に実施された調査でも，60%はフランスが世界に開かれすぎで，もっと保護されるべきと考えている［Goodlifee 2015：127]。

（13）マリーヌはギアナで24.3%，マヨット（Mayotte）で27.7%を獲得し，ニューカレドニアやフランス領ポリネシアでは30%を超える票を集めている。FN にとって「不毛の地」であった海外県・領土で高い失業率や不況を背景に大きく票を伸ばし得票能力の全国化を証明している［Ivaldi 2017：93-４]。

（14）2012年大統領選挙第１回投票の前日に実施された世論調査では，有権者の関心は財政赤字の改善（42%），失業者の削減（38%），賃上げと購買力向上（35%），不法移民との闘い（28%），教育（25%），軽犯罪の減少（18%），貧困の改善（18%）の順であり，移民問題は上位に並んではいない。ただし，軽犯罪や失業の問題が典型であるが，そのような争点には移民問題が絡んでいた。また，有権者全体として移民争点への関心が高くないとしても，マリーヌの支持者では77%が「不法移民との闘い」を最大の争点と考えている［Chebel d'Appollonia 2015：188]。

（15）2017年大統領選挙の第１回投票と決選投票の間で FN 票は12.6%伸張しているが，その票の多くはフランス南部と北東部フランスで確保し，全体の得票率を押し上げている［Ivaldi 2017：102-103]。

(16) 大統領選挙に際してマリーヌは，EU の「共通農業政策」を「フランス農業政策」に置き換えること，国産農産物への「インテリジェントな保護主義」の実施，若者の帰農への財市的支援を掲げた［Ivaldi 2017：98］。農業への保護主義的政策を唱えることで，EU 統合によって他国の安い農産物との競合を強いられている農村にアピールし，それは一定の成功を収めている，

(17) 大都市部での不振，農村部や小規模自治体，大都市郊外で良好なパフォーマンスを見せる傾向は2012年の大統領選挙からみられたが，その現象は2014年の欧州議会選挙，2015年の地域圏議会選挙でも確認された。マリーヌと FN の得票分布の変化は，フランスの大きな社会空間的再編を表現している［Ivaldi 2017：96-97］。

(18) FN が得票に比べて議席を増やせなかったことには，選挙での FN 包囲網も大きな役割を果たしていた。小選挙区で実施される2015年の県議会選挙と同様に，比例代表制を基本とする地域圏議会選挙でも既成政党による反 FN の協力が功を奏している。同選挙では，決選投票で FN の当選を阻止するために左右の既成政党が「共和主義戦線（un front　républicain）」を結成して，FN が地域圏議会を支配することを阻止した［Ivaldi 2017：104-105］。

(19)『ルモンド』紙のために Ipsos Sopra-Steri が2017年 6 月に実施した世論調査。

(20) フィリッポは脱ユーロの立場を放棄することに異議を唱えて新組織「愛国者（des Patoriotes）」の結成に踏み切り，2017年 9 月21日には　離党を表明した。「愛国者」は FN 内のフィリッポ派を中心とした公称2000人の小組織ではあるが，他の主権主義政党の結集軸になることを目指している。ただ，初陣であった2017年国民議会選挙は，議席獲得に失敗して不調に終わっている［Evans et Ivaldi 2017：186，200］。1999年に離党したメグレの例が典型であるが，党内で有能な幹部が FN を離れて別組織を結成しても，本家である FN に取って代われないことが今回も証明された。

(21) 例えば，2002年の大統領選挙の第 1 回投票で敗退した左翼陣営は決選投票に向けて保守候補シラクへの投票を呼びかけ，ルペンは惨敗に追い込まれた。また，最近でも，2015年の地域圏議会選挙第 2 回投票に向けて左右の既成政党が反 FN の包囲網を形成し，FN は地域圏の執行部を掌握することに失敗している。保守と左翼による協力（「共和主義戦線」）が実現すると，FN の勝機は大きく低下する。

(22) 一つの可能性は二極対立（左翼－保守）から三極対立（左翼－保守－FN）に持ち込んで，FN との協力を保守に強いることである。小選挙区で実施される県会議員選挙を例にとれば，FN 票の増減は保守票のそれと相関している。つまり，FN は明確に保守票を食っている。とすると，FN が伸張するほど保守票が侵食され，３極対立の選挙区では左翼の勝利を許してしまう。国民議会選挙でも同じ可能性がある場合，保守は FN との協力への誘惑にかられるだろう。また，もう一つは，保守を分裂させて右派的部分との協力関係を築くという可能性が考えられる。保守がリベラルに傾くとき，FN との協力を求める動きが表面化する可能性がある。

(23) 2002年大統領選挙では，棄権は第 1 回投票から決選投票では28.4％から20.3％へと8.1％も減少したが，2017年には22.2％から25.4％と増加しており，無効票（3.0％）・

白票（8.52％）と併せると有権者の三分の一が選択を放棄している。「極右」候補当選への危機感よりもマクロンとの選択に迷った有権者の投票行動が浮かび上がっている。マクロンの方がマリーヌより「まし」だとは思っても，マクロンが勝ちすぎることへの警戒感も多くの有権者があって棄権か白票を選択したと解釈できる［Bréchon 2017：70］。

参考文献

〈日本語文献〉

井出季彦（2009）『移民のフランス－「シテ」からみた大統領選挙－』西日本新聞社。

植村　邦（2002）『フランス社会党と第三の道』新泉社。

大嶽秀夫（2017）『日本とフランス－「官僚国家」の戦後史』NHK 出版。

小熊英二（2012）『社会を変えるためには』講談社。

遠藤　乾（2017）『欧州複合危機－苦悩する EU，揺れる世界』中央公論新社。

長部重康（1995）『変貌するフランス－ミッテランからシラクへ』中央公論社。

尾玉剛士（2017）「［フランス］巨大保守政党の結成，右傾化戦略とその後の混迷－21世紀の動向」，阪野智一・近藤正基編『刷新する保守－保守政党の国際比較』弘文堂。

尾上修吾（2018）『BREXIT 「民衆の反逆」から見る英国の EU 離脱－緊縮政策，移民問題，欧州危機』明石書店。

国末憲人（2016）『ポピュリズム化する世界』プレジデント社。

庄司克宏（2007）『欧州連合－統治の論理とゆくえ』岩波書店。

―　　（2016）『欧州の危機』東洋経済新報社。

―　　（2018）『欧州ポピュリズム－EU 分断は避けられるか』筑摩書房。

シリネッリ，ジャン＝フランソワ（川嶋修一訳）（2014）『第５共和制』白水社。

竹沢尚一郎（2011）「フランスにおける移民問題の複合性－サンパピエと移民第二世代の視点から」，竹沢尚一郎『移民のヨーロッパ－国際比較の視点から』明石書店。

田中素行（2016）『ユーロ』，岩波書店。

伊達聖伸（2018）『ライシテから読む現代フランス－政治と宗教のいま』岩波書店。

土倉莞爾（2015）「パスカル・ペリノーのフランス FN（国民戦線）論」『法学論集』第３号。

―　　（2016）「変貌するフランス「国民戦線」（FN）」，水島治郎編『保守の比較政治学』岩波書店。

中山洋平（1999）「フランス」，小川有美（コーディネーター）『国際情報ベーシックシリーズ　EU 諸国』自由国民社。

―　　（2016）「福祉国家と西ヨーロッパ政党制の『凍結』－新急進右翼政党は固定されるのか？」，水島治郎編『保守の比較政治学』岩波書店。

畑山敏夫（1995ａ）「『国民戦線』の自治体支配」『佐賀大学経済論集』第32巻第１号。

―　　（1995ｂ）「フランス1968年５月－政治的ユートピアの終焉」岡本宏編）『1968年

－時代転換の起点』法律文化社。
―　（1997）『フランス極右の新展開－ナショナル・ポピュリズムと新右翼』国際書院。
―　（2004）「もうひとつの対抗グローバリズム－国民国家からグローバル化への反攻」，畑山敏夫・丸山仁編著『現代政治のパースペクティブ』法律文化社。
―　（2007）『現代フランスの新しい右翼－ルペンの見果てぬ夢』法律文化社。
―　（2008）「2007年大統領選挙とフランスの新しい右翼－ルペンの敗北をめぐって」『佐賀大学経済論集』第41巻第２号。
―　（2009）「現代フランスにおける青年と政治－政治的ユートピアから遠く離れて」『佐賀大学経済論集』第42巻第２号。
―　（2012）『フランス緑の党とニュー・ポリティクス－近代社会を超えて緑の社会へ』吉田書店。
―　（2013ａ）「2012年大統領選挙・国民議会選挙とマリーヌのFN」『日仏政治研究』第７号。
―　（2013ｂ）「2012年大統領選挙・国民議会選挙とマリーヌの国民戦線（FN）－右翼ポピュリズム政党の勢力回復が意味するもの」『佐賀大学経済論集』第46巻第１号。
―　（2013ｃ）「逆風のなかの欧州統合－国民戦線のEU批判とフランス政治の『主権主義化』」『立命館大学　政策科学』第22巻第３号。
―　（2015）「マリーヌ・ルペンと新しい国民戦線－『右翼ポピュリム』とフランスのデモクラシー」，高橋進・石田徹編著『ポピュリズム時代のデモクラシー』法律文化社。
―　（2016）「フランスの『欧州懐疑主義』と『再国民化』」，高橋進・石田徹編『「再国民化」に揺らぐヨーロッパ』法律文化社。
広岡裕児（2016）『EU騒乱－テロと右傾化の次に来るもの』新潮社。
藤巻秀樹（1996）『シラクのフランス－新ゴーリスト政権のジレンマ』日本経済新聞社。
水島治郎（2016）「『自由』をめぐる闘争－オランダにおける保守政治とポピュリズム」，水島治郎編『保守の比較政治学』岩波書店。
―　（2017）『ポピュリズムとは何か－民主主義の敵か，改革の希望か』中央公論新社。
宮島　喬（2016）『現代ヨーロッパと移民問題の原点－1970，1980年代，開かれたシチズンシップの生成と試練』明石書店。
村上直久（2016）『EUはどうなる-Brexitの衝撃』平凡社。
モーリス・ラーキン（向井善典監訳）（2004），『フランス現代史－人民戦線期以後の政府と民衆』大阪経済法科大学出版部。
吉田　徹（2011）『ポピュリズムを考える－民主主義への再入門』NHK出版。
ロドリクス，ダニ（2013）『グローバリゼーション・パラドクス』白水社。
渡邊啓貴（2015）『現代フランス－「栄光の時代」の終焉，欧州への活路』岩波書店。

〈外国語文献〉

Albertini, Pierre (1997), *La crise du politique. Les chemains d'un renouveau*, L'Harmattan.

Alduy, Cécil (2016), "Nouveau discours, nouveaux succès" *Pouvoirs*, no.157.

Alidières, Bernard (2014), "Le temps du vote Front national et de ses representations" dans Giblin, Béatrice (sous la direction de), *L'Extrême droite en Europe*, Ēditions La Découverte.

Amjahad, Anissa, et Jadot, Clément (2012), "Le modèle organisationnel du Front national" dans Delwit, Pascal (ed.), *Le Front national. Mutations de l'extrême droite française*, Éditions de l'Université de Bruxelles.

Bréchon, Pierre (2012), "La droite à l'epreuve du Front national" dans Delwit, Pascal (éd.), *Le Front ntional. Mutations de l'extrême droite française*, Ēditions de l'Universitêde Bruxelles.

Chebel d'Appolonia (2015), "Immigration and the 2012 Elections in France" in Goodliffe, Gabriel and Brizzi, Riccardo (ed.), *France after 2012*, Berghahn.

Checcaglini, Claire (2012), *Bienvenue au Front national d'une infiltré*, Ēditionsacob-Duvernet.

Cliché, Jean et Boy, Daniel (2017), "Victoire d'une nouvelle force politique face à une gauch dispersée", *Revue politique et parlemetaire*, no.1083-1084.

Club de l'horloge (1985), *L'identité de la France*, Albin Michel.

Collovald, Annie (2004), *Le《Populisme de FN》, un dangereux contresens*, Ēditions du Croquant.

Corbière Alexis (2012) *Le parti de l'étrangère. Marine Le Pen contre l'histoire républicane de la France*, Ēdition Tribord.

Crépon, Sylvain (2006), *La Nouvelle extréme droite. Enquète sur les jeunes militants du Front national*, L'Harmattan.

— (2012), *Enquête au cœur du nouveau Front national*, Nouveau monde éditions.

Dabi, Fédéric (2015), "2012-2015: continuités et ruptures dans la structuration des élections PS, UMP et FN", *Revue politique et parlementaire*, no.1075.

Delwit, Pascal (éd.) (2012), *Le Front national.Mutations de l'extrême droite française*, Ėditions de l'Université de Bruxelles.

Dézé, Alexandre (2012) *Le Front national: à la conquête du povoire?*, Almand Colin.

— (2016), "Le changement dans la continuité: L'organisation partisane du Front national", *Pouvoirs*, no.157.

Dolez, Bernard et Laurent, Annie (2016), "Nord-Picardi: tournant historique, victoire de Bertrand", *Revue politique et parlementaire*, no.1078.

Evans, Jocelyn et Ivaldi, Gilles (2017), "Législatives: Répercussions de la présidentielle et contre-performance du Front national", *Revue politique te parlementaire*, no.1083-1084.

Fersan, Henri (1997), *Le Racisme anti-Français*, L'Ancre.

Fougier, Eddy, “Les inconnues du vote des agriculteurs”, *Revue politique et parlementaire*, no.1083-1084.

Fourest, Caroline et Venner, Fiammetta (2011), *Marine Le Pen démasquée*, Éditions Grasset & Fasquelle.

Fourquet, Jérôme (2014), “Municipales: le FN poursuit son enracinement”, *Revue politique et parlementaire*, no.1071-1072.

Front national (1985), *Pour la France-programme du Front national*, Albatros.

— (1993), *300 mesures pour la renaissance de la France*, Ēditions nationales.

Gombin. Joël (2016), “Le Front national après élections europénnes”, *Revue politique et parlementaire*, no.1071-1072

Goodliffe, Gabriel (2015), “The Resurgence of the Front National” in Goodliffe, Gabriel and Brizzi, Riccardo (ed.), *France after 2012*, Berghahn.

Heine, Sophie (2009), *Une Gauche contre l’Europe? Les critiques radicales de altermondialistes contre l’Union européenne eu France*, Ēdition de l’Université Brusselles.

Igounet, Valérie (2014), *Le Front national de 1972 à nos jours*, Seuil.

— (2016), “La conversation social du Front nationalles, mythe ou réalité?”, *Projet*, no.354.

Ivaldi, Gilles (2012), “Permanences et évolutions de l’idéologie frontiste” dans Delwit, Pasca (éd.)l *Le Front national.Mutations de l’extrême droite française*, Ėditions de l’Université de Bruxelles.

— (2014), “Réflexions sur la pousée des radicales populists européen”, *Revue politique et parlementaire*, no.1971-1072.

— (2017), “Forces et faiblesses du Front national”, *Revue politique et parlrmentaire*, no.1083-1084.

La Gauche forte (2014), *Le Guide anti-FN*, Ēditions L’ai lu.

Lebourg, Nicolas (2016), “Les dimensinos internationals du Front national”, *Pouvoirs*, no.157.

Lecœur, Erwan (sous la direction de), *Dictionnaire de l’extrême droite*, Larousse.

Le Gall, Gérard (2016), “Les élections regionals 2015: des élections de confirmation”, *Revue politique et parlementaire*, no.1978.

— (2017), “Victoire Macron, contingence et nécessité”, *Revue politique et parlementaire*, no.1083-1084.

Le Pen, Marine (2006), *À contre flots*, Grancher.

— (2012), *Pour que vive la France*, Gracher.

Liszkai, Laszlo (2011), *Marine Le Pen.Un nouveau Front national*, Éditions Favre SA.

Machuret, Patrice (2012), *Dans la peau de Marine Le Pen*, Seuil.

Mandon, Aurélien (2013), *The Mainstreaming of the Extreme Right in France and Australia*, Ashgate.

Maniére, Philippe (2002), *La vengence du people.Les élites, Le Pen, et les Francçais*, Plon.

Mayer, Nonna (2012), “De Jean-Marie Le Pen à Marine Le Pen: l’électorat du Front national a-t-il changé?” dans Delwit, Pascal (éd.)., *Le Front national.Mutations de l’extrême droite française*, Ėditions de l’Université de Bruxelles.

Mègret, Bruno (et als.) (1992), *Le mondialisme.Mythe et réalité*, Éditions nationales.

— (1998), *La Nouveau Europe.Pour la France et l’Europe des nations*, Éditions nationales.

Mossuz-Lavau, Janine (2017), “Elles votent”, *Revue politique et parlementaire*, no.1083-1084.

Muxel, Anne (2012), “La tentation des partis extremists chez jeunnes” dans Orfali, Birgittta (sous la direction de), *La banalisation de l’extrémisme à la veille de la présidentielle. Radicalisation ou dé-radicalisation*, L’Harmattan.

Orfali, Birgittta (sous la direction de) (2012), *La banalisation de l’extrémisme à la veille de la présidentielle.Radicalisation ou dé-radicalisation*, L’Harmattan.

Ouraoui, Mehdi (2014), *Marine Le Pen, Notre faute.Essai sur le dèlitement rèpublicain*, Michalon Éditeur.

Perrineau, Pascal (2012), *Le choix de Marianne.Pourquoi, pour qui votons-nous?*, Fayard.

— (2013), “L’Ėlectorat de Marine Le Pen, ni tout à fait le même, ni tout à fait un autre” dans Perrineau, Pascal (sous la direction de), *Le vote normal.Les élections présidentielle et législatives d’avril-mai-juin 2012*, La Fondation nationale des sciences politiques.

— (2014), *La France au Front*, Fayard.

— (2016), “Montée en puissance et recompositions de l’électorat frontiste”, *Pouvoirs*, no.157.

Pisani-Ferry, Jean (2005), “Europe: une crise qui va loin” dans Mergie, Alain et als, *Le jour où la France a dit〈non〉. Comprendre le référendum du 29 mai 2005*, Plon.

Philippot, Damien (2011), “2007-2011: le retour du Front national” *Revue politique et parlemetaire*, no.1064.

Raynaud, Philippe (2016), “La nébuleuse intellectuelle de Front national”, *Pouvoirs*, no.157.

Rosso, Romain (2011), *La face cachée de Marine Le Pen*, Flammarion.

Rouban, Luc (2017), “Le vote des fonctionnaires”, *Revue politique et parlrmentaire*, No.1083-1084.

Simon, Jean-Marc (2011), *Marine Le Pen, au nom du père*, Ēditions Jacob-Duvernet.

Sineau, Mariette (2012), “D’un Le Pen l’autre: l’image du Front national à la veille de la Présidentielle de 2012” dans Birgittta Orfali (sous la direction de), *La banalisation de l’extrémisme à la veille de la présidentielle.Radicalisation ou dé-radicalisation*, L’Harmattan.

Schemeil, Yves (2010), “Les Français et l’Europe: espérance et prudence”,『日仏政治研究』第5号。

Taguieff, Pierre-André (2012), *Le nouveau national-popuulisme*, CNRS Éditions.

Turchi, Marine (2016), “L’ Argent du Front national et des le pen. Une famille aux affaires”, *Pouvoirs*, no.157.